

第2回「地域住民・移住者。ボランティアによるふるさと復興会議」でのご意見です。
(一部抜粋して掲載させて頂いております)

「みんなが笑いあえるところに」

ネットワーク作りができて、はじめて正しい必要な情報発信ができるのだと思う。

どんな情報を発信しなければいけないのか、その中身は何なのか皆で共有して何が必要かという事その内容を吟味しつつ、それは福島、日本ではなく世界中から見られているという事。

新しい年を迎えて、これからはきちんとした組織づくりをしていければ良いかなと思っている。一軒一軒の家がバラバラではなく自治会がそれぞれにできる連合会のようなものがあって、家庭と地域と学校が結びついていけばいい。他県の取組として、独居老人のお宅や高齢者夫婦のお宅で朝黄色のハンカチを外にだして夕方とりこんでもらう。昼間でてなかったら、声をかける。もしかして何かあったのかもと孤独死を防ぐ対策にもなるし周りに関心を持つようになる。それぞれのネットワークを重視していただければと思う。市役所や社会福祉協議会だけじゃなく、教員や老人ホームのスタッフが不足している状況。国や県に任しておくだけじゃなく南相馬から情報発信をしていかないといけない。行政と社会福祉協議会は別個のものではなく役割を考えたもっとお互い連絡をとっていただきたい。そうすれば間違った情報を発信されとか、情報発信は誰がしたとか意味不明なものが何ヶ月も出続けることはなかったと思う。ここに残った方やここからでていく方々が共に皆で笑い合えるようにという意味を込めてタイトルにしました。ボランティアのニーズを受入れる事務局が必要。

鹿島区の仮設や自宅避難の方を対象として物資を配布するボランティアをしてきた。ボランティア活動の限界と課題について話したい。有償ボランティアで期間雇用で働いている。

何が必要かなどを直接現場レベルでじかに聞いてじかにお渡しする活動をかれこれ半年以上している。課題に関してだと、こういった活動をしていると地元の企業などに民営圧迫じゃないかとか何を今更だとかどこまでやるのかなと言われる事が非常に多かった。

自分自身何が正しくて何が間違っているのかわからないが、今の南相馬市の現状を見たときに避難している世代の方々のニーズに関しては多岐にわたっていると思った。

南相馬市の県外避難者の実情は情報格差、意識的な格差、避難区域が分かれてしまっている事による様々な感情などの行き違いなどができ横のつながりが無くなっている。除染が進んでも戻ってくるとは限らない。医療費や居住にかかる費用だとか補償問題など目に見えない保証金の話やこれからどこにどう住んでいくのかなど深刻。現場レベルでいろんな方々の話を直接聞いたり情報をいただいて非常に強く感じた。

酪農家で牛乳を出荷していた。近所に迷惑をかけたく無いとの事で牛を閉じ込めてきたが、動物愛護団体の方が入って勝手に放したようだ。豚が畑を荒らしたり、他の家の中に入って死んでいたり、豚が牛を食べたり、そのような報道はされていない。正確な情報を発信すべきだ。知らない人はそれを鵜呑みにしてしまうのでやるならやるで徹底的に新しい情報をどんどん発信しないと意味が無い。放射能問題で家族内で意見が合わない。

子供を殺す気でいると自分の親に言われ一緒には住めなくなり家族崩壊の危機。

除染には人が必要。東電社員がきて除染をするべきだ。その辺、市ではぜんぜんわかってない。県自体が全部動いて国で指示しないと、一般市民が言ってもだめだ。

ネットワーク作りが非常に難しい。誰か間にとりもつ人がいてはじめて関係ができてくるという印象。関係づくりに促進していくうえで大事な事は、市民一人一人がそういった方向性を持つことが大事。思ったことを発言して自分の思いをぶつけ、その中で問題点が整理されるかもしれない。行政がやってくれる県がやってくれるじゃなくて意見をまとめたうえで上に上げましょう。その姿勢が一番大事、結局そういう形が無ければ行政は動かないし、国も動かない。市全体で復興に向けて活性化していくには行政の業務を保管するようなことを考えていく必要があるのでは。南相馬市には復興に向けて活動している団体がたくさんあります。南相馬ダイアログは15団体集まって、市民の方々の意見を取り入れる場所を作りましょうというようなことではじめています。市民の方に大勢参加していただいてご意見を集約するような形で考えています。それぞれの活動している団体に、いろんな意見をためずに言っていただきたい。どこまで実現できるかは正直わからないですがそれぞれの各団体が南相馬の為に頑張っていてやっていますので、集約していったらそういう動きがゆくゆくシステム的なネットワークもどんどんついてくるのでは。

飲食店を経営。「つながろう南相馬、ありがとうからはじめよう」をキャッチフレーズにして活動していたが、次のステップでいきずまっていた。そんな時、他の団体の方と話をしたら皆さん同じように次のステップをどうしようかと悩んでいたのと一緒に何かやりましょうということになり南相馬ダイアログを作るきっかけとなった。1回2回と話を進めて、皆で力を合わせて何かを形作ろうと考えてやっていました。今回、回帰支援センターの会に参加するのは初めてですが地元にながらこういう会があること知りませんでしたし、他の団体の方がどういった活動をしているのかも知らないまま過ごしてきたのだなと改めて実感しました。またこういった会で、どんな方が参加されてどんな意見を述べられるのか知りたい。

ボランティアさんの方や若い人をつなげたいと思えば、やはり支援がほしいと思います。自分のお小遣いをけずって来てくれているので金銭的に助けてあげてほしいと市の方をお願いしたい。南相馬市に移住してきて良かったと思っている。その事をしっかり伝えていきたい。日本人で良かったとか、きれいごとに聞こえるかもしれませんが大和心を発信していける場所ではないかなと思っている。お金が無い人には支援してほしい。

津波と地震で烏崎地区の160軒のうち残ったのは15軒だけだった。水道などはなおして、自分達だけは住めるようになった。南相馬市の為に民泊はまだできなくても何か料理の方で手伝える事があればやりたいと思っている。田んぼ畑は作れないが、健康な体と家があって、ここを楽しみに来てくれるような人がいたらなんとかやっつけていけるかなと思う。除染まではいかないが、ひまわりや菜の花を植えたりしていた。日赤の福祉のボランティアで老人ホームへ行ったりもしていた。何か手助けをして南相馬をもとの通りにしていきたい。

南相馬の為に少しでも意欲を尽くしたい。震災から感じて居ることはコミュニケーションやネットワーク作りが大切という事。そこから情報を経ていきたい。

釣りが出来て、百姓して、少ない年金で暮らしていきたいと思っていたのですが・・・微力ながら尽くしたい

3月29日、ボランティアセンターに登録しまして、この部屋は救援物資の倉庫になっていた。ボランティア活動を通して、個人的にも団体的にも活動をしている。いま、現在の原発の様子が気になります。情報発信も大事ですが南相馬市の放射線物質セシウムがどうなっているのか、このままここに住んでいていいのか？残るにはどうすればいいのか？地元のお母さん方はとても敏感になっている。今考えているのが大きい余震がきた時に原発がどうなっているのか？すぐに逃げられるのか、逃げるルートを作ったほうがいいのか？皆、考えている。まだ足元も固まっていないのに未来を語れないと思いつつも、未来を語らなければ私達の心が救われない。明るい話題、見えない放射性物質を見たくない、見えないようにする為に鈍感にならざるを得ない疲弊した生活をしている。

警戒区域の人間としては、戻りたいという気持ちから、戻れないかもしれないという気持ちになっている。若い世代の人達が戻って生活できる環境になるのか？戻らざるを得ない方々や外で仕事を持っている方の意識的な違い。放射能のこととか意識的な部分や補償の問題、あきらめてるわけではないが温度差がある。復興というひとつでくくられるような段階ではない。ボランティア受付は行ってないといっても現状はいくらでもニーズはあります。学生ボランティアであれば教育支援という事で集会所などを借りて学習を見ていただけないか？避難生活で学習の遅れを取り戻したい、親御さんのストレスというか今までと違う環境で子供をみつけれないでいる。騒がれると困るから甘やかしてしまうとかある。学習レベルの低下など心配されてる。

ボランティアの支援メニューなどを考えて提案していくなどの活動を最近始めた。ニーズ困った時にはうちに来て下さいいくらでも話伺います。実際支援していただくこともいろいろありまして、学生だからこれができないというものはほとんど無い。ボランティアのニーズはまだまだありその発信は今までみたいな社会福祉協議会とかではなく一般の団体が発信していくこと

メディアと住民の方との情報の違いがある。情報を共有することが大事だと思いました。